

ヒマラヤ

No. 122

● 特集 ランタン・リ初登頂



1982 JAN.

日本ヒマラヤ協会



THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

1983年ヒマラヤ登山学校隊員募集

ヌン (7,135m)

1983年度ヒマラヤ登山学校は、カシミールの盟主ヌン峰で実施することに決定しました。これは単なるバック登山とはまったく異なり、自ら遠征を行なえる人材を育成することを主眼としており、経験豊富なインストラクターのもとに、正しいセオリーにのっとった確実な登山を指導しています。隊員はすべて、装備・食糧・輸送・梱包・渉外等の具体的実務に参画していただき、また国内山岳での強化合宿も行なうなど、ヒマラヤ遠征全般を体得できるように組まれております。

過去の卒業生は、現在ヒマラヤで幅広い活動を行っており、登山学校の経験を基にしてさらに遠征を実践している人は9名に達し、その中には8,000m峰登頂者4名も含まれています。

登山学校隊の実績は下記のとおりです。

- 1977年 タルコット (6,099m)
(JACに協賛して行なった)
- 1978年 ヌン (7,135m) 4名登頂
トリスルI峰 (7,120m) 6名登頂
II峰 (6,690m) 7名登頂
- 1979年 キャシードラル (6,400m) 6,000mまで

- 1980年 ケダルナート・ドーム (6,831m)
19名登頂
- 1981年 ナンダ・カート (6,611m) 事故のため断念
- 1982年 クン (7,077m) 現在準備活動中

実施要項

- 目的 ①ヌン (7,135m) 登頂
②高所登山の基礎修得
- 時期 1982年7月末～8月末 (35日間)
- 負担金 70万円 (航空運賃の変動等により変わることもあります)
- 定員 20名 (申込順)
インストラクター4名 (医師含む)
- 申込み 1982年6月末までに下記宛に申込みのこと (資料を送ります)
- 〒160 東京都新宿区高田馬場3-23-1
淀橋食糧ビル506号日本ヒマラヤ協会

★今年度より準備活動、強化合宿等をより万全に行なうため、締切りを早くします。希望者は早急にお申し込み下さい。

この登山隊の旅行手続は、株式会社西遊旅行が担当します。旅行業代理店業1976号

表紙写真

ランタン氷河最奥に設けたベースキャンプからランタン・リを望む。
(那須宗一)

ヒマラヤ No.122

1. ヒマラヤ放談 ————— 高橋好輝
4. ヒマラヤニュース〈地域ニュース・インフォメーション・トピックス・新刊案内〉
7. ヒマラヤの報告書紹介⑩〈LINK SAR 1979〉
8. 特集 ランタン・リ 初登頂 ————— ネパール日本合同ランタン・リ登山隊
16. 連載 ⑨ 未踏への誘い「カラコルム・ヒンドウクシュ編」(1) 稲田定重
⑩ VISIT TO HIMALAYAN CLIMBING TEAM (1) 東海大山岳部
ヒマラヤ閑話 ⑪ ————— 水野勉
24. 事務局月誌・寸感

ヒマラヤ放談

高橋好輝（たかはし・よしてる）氏、ヒマラヤ登山について確固たる信念と考え方を持つカモシカ同人の御意見番。ヒマラヤの計画が始まると、寝ている時もヒマラヤ登山のことを考えているのではないかと思えるほどの内容のあるハナシが次から次へと出てきて、ズボラ人間には本当にこわい人である。通称「ヨシさん」と呼ばれている。



高橋 好輝

●なぜ、ペアーへ……？

—— 明けておめでとうございます。ヒマラヤ全域で事故の非常に多かった1981年でしたが、いよいよ今年はダウラギリI峰のペアー・ルート登山の年になりましたね。今日はこの登山計画を中心に抱負や考え方をお聞きしたいと思います。

高橋 それは何と云っても自分達の納得の行く登り方をしたい、ということです。世間というか世界のトップの登山と云われているアルパインスタルなどというものに惑わされない「カモシカ同人」の登山を実践してみたいと思っています。

「理念」などと大仰なことは考えてはいませんがカネをかけずに、気の合った仲間が集まって、合理的に、効率の良い登山を徹底的に追求してみたいと思います。出来れば誰も登っていないに越したことはありませんしね。

我々貧乏社会人がカネも時間も無いのに8,000m峰を登ろうという訳ですから、カネをかけられないのです。そのためには例えば荷物の量を極力おさえる。そうすれば荷上げ、荷下りと毎日つらい登りを繰り返さなくて済みますし、登山期間も短縮出来ます。当然、登頂の可能性も高まります。

登らんがためにちょっと登れそうな者がいれば声をかけ、誰でも呼び集めるということは絶対にやらないし、登頂するためには手段を選ばない、などということも絶対に考えません。

—— 分りました。そういったことと、今回のペ

ー・ルートを選択したこととはやはり関係がある訳ですか？

高橋 本当を云えば私自身は最初この山の南東稜を登りたかったんですが、そんな話をいつもしていた群馬伍連が78年に登ってしまいました。まあ登り方を考えれば南東稜よりはペアー・ルートの方が適してはいます。このルートも誰かが登ってしまえばそれでも良かったのですが、残っていましたので。

それに何と云ってもペアー・ルートはこの山の登山史の中でも忘れることは出来ません。1950年のエルゾグ隊は南東稜をうかがった後にアンナブルナを初登頂し、1953年以後はこのペアー・ルートに世界各国から挑戦し続けていた由緒正しきルートです。

今回集まった隊員の多くがカモシカ同人や群馬伍連でダウラギリ山群へ2度、3度と登っています。ですからネパールヒマラヤの中でもダウラギリ山群が我々の中では一番良く分る。それらの経験を生かせると思います。

—— しかし、写真などを見ても決して易しいという訳ではないでしょう？

高橋 もちろん全体的にみればそんなに生易しいルートではありません。今でも未踏をほこっているのですから。上部で過去9隊の殆んどが撃退されている北西稜に出る、例の難場が7,800m付近にあります。しかし、そこまではミャンディ氷

河上のB・Cからかなり直線的に比較的易しい雪のルートがとれ、スピーディーに登れる可能性があります。ですからそういった舞台で、それらの失敗した隊とはひと味違う登山を展開してみたい訳です。

私達のようにごく普通のレベルの人間がこういった考え方で登るにはエベレストなどの大ジャイアンツではちょっと高過ぎ、このダウラギリI峰程度の高さで1人でも多くの人間が8,000m峰登頂の喜びを味わおうというものです。

●ダウラは秋がいい

——かなりの人数の登頂が期待出来そうですが、最初のダウラギリIV峰や次のダウラギリII、III、V峰の縦走時のように2桁台の登頂をねらいますか？

高橋 まあそれは運やその時の状況によると思いますが出来るだけそうしたいと思います。それには効率の良い登山を徹底的に追求することが必要になります。登山をカネで解決するのではなく、いかに少額で登るかということ。大金を投入しなくては登れないというのであれば、まだその山やルートを登るには時期早尚である。レベルの上がるのを待つか、カネを使わないで登る方法を真剣に考えるべきであろうと思いますネ。

例えば、お金については今回は個人負担金を60万円位でおさえようとしています。経験者も多いですし、そのつもりで計画し、準備をすれば何とか可能であると思います。

——登山シーズンについてですが、好さんは特に強くポストモンスーンを主張されていますが。

高橋 今までのヒマラヤ登山はたしかに春が全盛でした。しかし山によっては秋の方が有利なところもあると思います。私自身の少ない経験からですが特にダウラ山群はそういう山域のように思えます。もちろん学者ではありませんのであまり専門的なことを断定的には云えません。71年春75年秋のダウラIVの経験とこのIV峰へ向った15隊程の登山隊の記録などから割り出した結論です。最近のように春の申請が一杯だから、と云ったものではありません。

ブレとポストの差は要するに雪の問題です。秋

はモンスーン中から雪線が上がり、5,000m位まで大した雪が降りません。春は3,000m台からかなりの雪となる。そして時に雷も伴います。

この雪の多少をルートの特性に利用することが出来ます。75年秋のエベレスト南西壁とマカルー南壁の成功はこの良い例でしょう。

私達の75年秋のダウラギリIV峰の時もこのモンスーンを利用したかたちであったが、今回はルートの雪崩などの危険も考えられるのでそれが出来ない。そこでその期間を使って順応トレーニングを行うつもりです。これも実登山開始後の効率的行動には欠かせません。

実質的に登山が始まってからも上部キャンプへの荷上げは極力少なくするつもりで、高所では出来るだけガマンをし、その分はなるべくB・Cまで下る回数を多くして優雅(?)に過ごせるようにしたい。

——好さんはこれまでに71年と2度ダウラギリIV峰へ行かれ、先頭になって登ってこられたのですか、今度はいかがですか？

高橋 いやア、今回はルート工作のトップは退こうと思っています。私などよりはもっと早く確実に登れる隊員が何人もいますから。安全、確実、迅速の登山が最良です。あと「安い」が入るともっと良いかな。

とは云っても登頂はしたいと思ってはいますよ。自分が登頂出来ない登山計画なんか立てないし、第一情熱が湧きませんよ。ベアー・ルートに登れると思うから行く訳です。自分が登れなくなったら友人の登山の応援でもすることにします。

●IV峰の勝利

——71年のIV峰登山について少しお話し頂けませんか？

高橋 所属のGHMJというクラブで69年のネパールヒマラヤの解禁を機に「ヒマラヤへ行こう」ということになり、準備を始めました。その頃のクラブは岩登り専門の集まりでしたので岩登りさえ上手で少しその経験を積めば、ヒマラヤであろうと、どこかの山であろうと登れるものと思い込んでいました。

最初はダウラギリのII峰をねらって許可を取る

うとしたがオーストラリアに先を越されてしまい、仕方なく「N峰」に行くことになったんです。その頃のダウラ山群は未踏峰がたくさんありました。I峰とブタ・ヒウンチュリだけが登られていて、69年にグルジャ・ヒマール、70年にチェレン・ヒマールとV峰が相次いで日本隊に登られました。がまだまだ高い方が残っていました。

長い雪稜を雷や大雪にやられながらとにかくキャンプを3つ作り、ミャグディ・マータ(6,273m)までロープもスノーバーも使い果して必死で到達したもののパートナーが誤まってロープをとめてあったピッケルも落してしまい、えらい急斜面を1本のピッケルをついて下ったりして、とにかく惨敗して帰りました。

ヒマラヤの知識も無かったし、N峰について言えばオーストリー隊の遭難と関西登高会の話くらいで、何も知らなかった訳です。ミャグディ・マータまではN峰の南面ルートでは半分道中でした。

その時の隊長がクラブ代表であった芳野満彦氏でした。この人は奇人とも云えるくらい、稀にみるアイデアマンであり、名ブランナーでした。ケンカっ早く、まあ庶民を代表する登山家というところでした。

——その時に今日のインタビュアーである私・八木原がやはりこのN峰の同ルートに偵察に行っており、山で一緒になった訳ですが、75年の再挑戦についていきさつなどをちょっと。

高橋 失敗して帰って1年もすると、もう1度やってみようということで田中祥治君と話し合い、やはりメンバーだった浅葉雄司君なども入り、カモンカスポーツのダンブさんや奥さんの今井通子さん達に話を持ちかけ、群馬の71、72年の隊員であった八木原君達にも声をかけ、カモンカ同人が73年の秋に出来たという訳です。

結果はポストモンスーンに14隊員中11名が登頂する事が出来ました。この時まで10数隊全部が失敗し続けていましたが、秋のオーストリア隊やイギリス隊の方が春の登山隊よりも頂上近くまで行っているところに目をつけ、考えてみた訳です。

●ヒマラヤは「意識」と「信念」が大切

——カモンカ同人についてはどんなふうにお考えですか？

高橋 カモンカ同人というのは、とりあえず便利な組織だし、制約することのないように、今までどおりヒマラヤへ行きたい人間がその中で企画し、実践すればいいでしょう。規約を作ったり、あまり内部をカッチとまとめようとすると、結局は「山岳会」や「クラブ」になって、「同人」ではなくなってしまいます。最初はN峰登山の終了後に終るべき組織だったが、ダウラII～III～Vの縦走に成功し、どうも存続するより仕方ない組織になってしまった。それどころか今回のベアルート、その次はエベレストをネパール側と中国側(チョモランマと云うべきか?)から冬期にランデブーしようという壮大な計画が1983年12月～1984年2月にかけて行なわれようとしている。もう解散どころではないです。

——最後に今後のヒマラヤ登山について……

高橋 こうだとはっきり云えないが、アルパイン、アルパインと騒ぐこともあるまい。違う方向もあるでしょう。云ってみれば初期のヒマラヤ登山だってまったくのアルパインスタイルであったように思うし、なにも固く考えることはないと思います。ハードでなくソフトにぶつかるほうが、おもしろいし、価値もあるのではないかな？ アルパインスタイルでは登れない山やルートもあるということを忘れないで欲しい。安易にプロの登山家のまねをするべきではないと思います。

経験者が増えてきましたが、その人たちの惰性の登山は感心しませんネ。経験者は「行けば何とかなる」と思わずに、常に初心に帰ってやるべきでしょう。自分の信念とか、登るということへの意識を作りあげてから出かけるべきであると思う。その意識が無かったり、弱かったりすると、やはりあまり良い結果は出ないんじゃないですか。

——どうも耳の痛い話となりました(笑)。今日はどうもありがとうございました。

(インタビュー構成 八木原啓明)

地域ニュース

《インド》

サリー氏から日本登山者に呼びかけ

日本人の遭難事故が続発した今年、インド登山財団（IMF）会長H.C.サリー氏から日本ヒマラヤ協会、日本山岳協会、日本山岳会にあてて注意を促す長文の手紙が届いた。同氏は日本の登山隊は高所順応の方法やヒマラヤの雪に対する知識が不足しているのではないかと指摘し、今後次のような点を守って欲しいと述べている。

- ・登山隊の中に最低2人以上のヒマラヤ経験者を含むこと。
- ・出発前に全隊員が医療検査を行なうこと。
- ・ヒマラヤについてよく勉強し、特に今夏サリー氏が来日した折、日本ヒマラヤ協会に託した小冊子“DO'S AND DON'TS”をよく読んでもらいたいこと。

また、インド側の努力として、今後IMFが登山隊にあてて天気予報を流すこと、リエゾンオフィサーはアプローチマーチ途上における最後の警察署あるいは軍隊と連絡を緊密にすることなどが述べられている。

当協会では今回のサリー氏の要請に応えるべく来年1月8日～9日にかけて、来年インドへ向かう登山隊が一堂に会して討議を行なう場を設定している（インフォメーション欄参照）。また、小冊子“DO'S AND DON'TS”については、会員の木村陽子さんが翻訳しており、当日会議の席上で配布する予定である。

《パキスタン》

パキ政府、規則一部改正か

パキスタン観光省では、会議の席上で以下のことが討議され、非公式ながら決定され、来年度より実施される可能性が大きくなっている。

- ①カラコルムハイウェイのロードパーミッションを不必要にする。
- ②トレッキングは現在高度5,800 mまでとして

いるが、これを6,000 mまでとする。

- ③フンザ以奥も自由に入れるようにする。

これらが実現すれば、カラコルム、ヒンドゥークシュのトレッキングは非常に魅力あるものとなるだろう。（11月11日イスラマバード督永忠子）

印・パ関係険悪化

インド政府は23日、ニューデリーのパキスタン大使館員3人をスパイの疑いで国外追放した。これに対しパキスタン政府は24日、カラチのインド総領事館員3人とイスラマバードのインド大使館勤務の1人にスパイ容疑で国外退去を命じたと発表、米国の対パキスタン武器援助などをめぐって冷め切っている両国関係は険悪化している。

（11月25日 朝日新聞）

インフォメーション

インドヒマラヤ研究会

日本ヒマラヤ協会では、来年インドの山へ向かうすべての登山隊にむけて下記のような研究及び情報交換の場を設定している。特に今年は遭難事故が多発し、サリー氏からの要請（ニュース欄参照）もあり、すべてのインドヒマラヤ登山隊の集合を呼びかけている。

- ・期日 1982年1月9日(土)15時～10日(日)12時
- ・場所 東京都勤労福祉会館（東京都中央区新富1-13-14 TEL 03-552-9131 地下鉄日比谷線「八丁堀」下車徒歩1分）
- ・会費 1泊2食資料代込み4,000円（懇親会費は別途）
- ・申込み 日本ヒマラヤ協会事務局（東京都新宿区高田馬場3-23-1 淀橋食糧ビル506）

札幌ヒマラヤ会議

2月21日(日)に、札幌市にて「ヒマラヤ会議」を開催します。詳細は次号にてお知らせします。

トピックス

ビスタリクラブ10周年記念トレッキング
H A Jの有志で組織しているビスタリクラブ（黒沢文代代表）は、今年で結成10周年を迎えた。同クラブではこれを記念して、ネパールヒマラヤのトレッキングに出かけ、藤木満、内田雅子、黒沢文代の3名が、10月30日から11月15日にかけてゴサインクンドを歩いてきた。

ナジールを囲む夕べ

今年8月、早稲田大学のK₂登山隊で登頂者となったナジール・サビール氏が、関係者の招待で来日し、11月10日歓迎会が開られた。

会場となった「アジア会館」には、1977年K₂隊を総指揮した吉沢一郎翁、中国側K₂を偵察して帰国したばかりの日山協関係者を中心に約50名が出席し懇談した。同時に、早大隊のK₂のスライドが核心部を中心に上映された。

パキスタンでおいしい米飯

イスラマバードのゲストハウス・シルクロードではこの秋、経営者の督永忠子さんがスワート地方で、日本の米に似たおいしい米を見つけ、その新米を大量に仕入れたとのこと。またカラチ在住の日本人の魚屋から週に一回、新鮮な魚を仕入れているそうで、これからは日本人のお客サンにおいしい日本食を提供できると語っていた。督永さんによれば「このお米、コシヒカリよりもおいしいのよ」だって。

新刊図書一覧

- ・チベットの7年 ハイシリヒ・ハラー著 白水社 10.5
- ・多摩源流を行く 瓜生卓造著 東京書籍 10.6.
- ・垂直の上と下 小森康行著 中央公論社 10.7.
- ・山岳誌 藤原肇著 東明社 10.9.
- ・自然観察者の手記(4) 岩田久二雄著 朝日新聞 10.9.
- ・旅の木の実 岡田喜秋著 文化出版 10.12.
- ・武蔵野 秋谷豊著 桐原書店 10.12.
- ・アルパインカレンダー1982年版 山と溪谷社 10.13.
- ・シルクロード今と昔(下) 車慕奇 小学館
- ・人類の周辺 今西錦司 筑摩書房 10.14.
- ・山溪ミニカレンダー③高山植物 10.16.
- ・シルクロード③中国-1 篠山紀信 集英社 10.17.
- ・ユーラシアシルクロード 加藤久晴他 日本テレビ 10.19.
- ・山の風の中へ 辻まこと 白日社 10.19.
- ・講談社ゼミナール選書「魅惑のシルクロード」 講談社 10.21.
- ・草木鳥獣・人 飯島衛 みすず書房 10.22.
- ・草木を訪ねて三百六十五日 足田輝一 新潮社 10.23
- ・越中の百山 北日本新聞 10.23.
- ・遠い人・はるかな山 手塚宗求 筑摩書房 10.23.
- ・続槍穂高連峰 山と溪谷社 10.23.

原稿募集

ニュース ヒマラヤ(中央アジア含む)の各地域の社会情勢・現地事情(入山事情)の変化、日本を含む各国登山隊の動勢、その他気のついた事をお知らせ下さい。ニュースソースも併記して下さい。

紀行 遠征、トレッキング、旅、etc.....。

ヒマラヤ及びシルクロードに関する地域なら何でも結構です。“記録”ではなく“紀行”としてお気軽に御投稿下さい。400字詰原稿用紙6~8枚程度、横書きでお願いします。

日本からヒマラヤから ヒマラヤ等に出かけた際の印象、現地からの便り、ヒマラヤに関して日頃思っていること何でも結構です。「ヒマラヤ」編集部やH A J に対する提言などもお寄せ下さい。

またヒマラヤ地域に出かけられる方、ハガキで結構ですから御一報下さい。

★投稿は会員、非会員を問いません。採用分には全国共通図書券をさしあげます。

★送り先 〒160 東京都新宿区高田馬場3-23-1 淀橋食糧ビル 506
日本ヒマラヤ協会

- ・カラーブックス「火山」 伊藤和明 保育社 10.26.
- ・万葉の花・大和路 入江泰吉 講談社 10.28.
- ・私のスケッチ技法 平山郁夫 実業の日本社 10.30.
- ・上越スキーガイド 水野涓司 岳書房 11.2.
- ・歩くスキー 成美堂出版 11.6.
- ・岩壁とおはよう 長谷川恒男 中央公論社 11.10.
- ・北山の道、続・北山の道 渡辺歩京 白地社 11.20.
- ・日本登山大系(2) 南会津・越後の山 柏瀬祐之

他、白水社 11.24.

- ・チョモランマ・チベット 日本山岳会 講談社 11.24.
- ・大岩壁 瓜生卓造 毎日新聞社 11.24.
- ・中央アツア自動車横断 ル・フェーブル 白水社 11.24.
- ・ヒマラヤ巡礼 スネルグローブ 白水社 11.24.
- ・東京の野鳥 大作栄一郎 東京新聞出版局 11.25.
- ・スキーをはけば怖くない 熊谷樵 朝日新聞社 11.25.
- ・尾根路Ⅱ 田淵行男 同時代社 11.25.

カラコルムセミナートレッキング隊員募集

H A Jではこれまでネパールヒマラヤで五百沢智也講師のもとにセミナートレッキングを実施してきましたが、このたび「この催しをパキスタンでも!!」という要望に応え、下記のような計画を組みました。

コーランの読経と炎熱の砂漠、コバニーの実るオアシスの憩い、そして豪快なカラコルムの氷河をあなたも歩いてみませんか。

実施要項

- 目 的 西部カラコルムバツラ山域の踏査及び
五百沢智也氏の指導による野外調査活動
- 時 期 1982年7月下旬～8月中旬
- 負担金 43万円(航空運賃の変動等により変わる
こともあります)
- 定 員 20名(申込順)
- 講 師 五百沢智也、他1名
- 申込み 1982年4月末日までに下記に申込みこ
と(資料を送ります)
- 〒160東京都新宿区高田馬場3-23-1
淀橋食糧ビル506 日本ヒマラヤ協会

踏査コースと日程

第1日 東京 → PIA → イスラマバード



▲バツラⅡ(7710m)南面

- 第2日 イスラマバード滞在(山行準備)
- 第3日 イスラマバード → バス → ギルギット
- 第4日 ギルギット → バス → ノマル
- 第5日～第16日 バツラ南面山域踏査(ノマル)
→ ナルタル谷 → ダイントール峠 → パール
→ バルタル氷河 → バツラベースキャンプ
→ トルタル氷河 → パール → チャルト
- 第17日 チャルト → フンザ(カリマバード)
- 第18日 フンザ → ギルギット
- 第19日 ギルギット → バス → イスラマバード
- 第20日、第21日 イスラマバード滞在(希望者は
タキシラ、ベジャワールなど見学)
- 第22日 イスラマバード → 東京

LINK SAR 1979

立正大学カラコルム登山隊

余談だが、先日「来年ヒマラヤに出かけるので相談に乗って欲しい」とルームを訪れた人がいて、一夜話をした。初めてで何もわからないとのこと、何かやと初歩的な方法論なども出たが、概してこのような人たちが最も関心を持つのは、許可取得とか通関、輸送その他の事務手続きはどんなふうにするめたらよいのかというようなことが多い。で、肝心の登攀活動についてとなると、「山に取りついてしまえば、もうこっちのものですよ」「日本での力量をそのまま発揮しさえすれば、まづ落せると思ってます」といったことになる。

しかし、現実には日本での力量を発揮すればヒマラヤの頂に立てるわけでは決してないし、BCを建設すれば山が「こっちのもの」になるわけでもない。

確かに外国に不馴れだったり、英語の不得手な人には山に取り付く以前の諸々の仕事は不安であろう。このような人たちが「山へ入れば俺たちの独壇場」と考えるのは、ある意味では自然なりゆきかもしれない。ひと頃、ヒマラヤも今や穂高の延長云々といった話が巷に流れたことがあるが最近このような言葉がきわめて悪い意味で解釈されていることが多いように思う。

今のヒマラヤが昔に比べて楽になったのは、登攀の面ではなくむしろ多くの初心者が不安の種にする渉外手続の方である。よほどの間抜け者でない限りそのようなことをしくじったためにめざす山へ行けなくなるなどというようなことは起らない。少なくとも自分の意志と力でヒマラヤに挑戦しようというほどの人なら、そんな間抜け者はいないと思う。しかし登攀における実践的な問題となると、そんな生易しいものではなく、多くの人々が最も基本的なことをすらわきまえていない。

余談が長くなりすぎてしまったが、立正大学カラコルム登山隊1979は、この報告書で見ると限りなくまとまった好チームで、街や山麓部分に比較的めんどりの多いパキスタンにおいて、スムーズ

に事をすすめ、山に向かっている。特に若い隊員の中に1人精力的に動きまわっている人が見受けられる。きっと思い出の多いすばらしい山行だったことと思う。しかし、この隊も登攀の面ではもうひとつ勉強が足りなかったのではないだろうか。第一にタクティクスの基本計画と実際の登攀がまるで違ったものになってしまっている。そして、最終アタック前に下へ降りて休養するという最も基本的な原則も守られていない。上へあがりつばなしになっていることが、どれほど危険なことかももう少し認識してもらいたい。また遠征終了後の反省事項にしても、医療用酸素についての見解は少しおかしい。「酸素を頼りにせず確実に高度順化することが、安全登山につながる」と考えるのは間違っていないが、そのために「必要性を感じない」というのは論理の飛躍である。私はこれまでに高所未経験者が初めての高度で非常に危険な事態に陥り、酸素ボンベによって一命をとりとめていた例を2度目撃している。攻撃と防禦をはっきり区別して物事を考えてもらいたいものである。

敗退の原因に上部岩壁が突破できなかったことがあげられているが、それ以前に5,890mのファイナルから7,041mのピークをビバークしてめざすというのは、高所初体験者には少し荷が重すぎるように思える。

いろいろと問題はあがあるが、その問題の故に一読に値する報告書だと思う。この隊のように熱意と努力は大いにあるが、勉強がもうひとつ足りなくて敗退したというような報告書こそ、卒直な意味でこれからの人に価値あるものになるのではないだろうか。

(ふ)

•発行 立正大学体育会山岳部



ランタン・リ初登頂

72739m

ランタン・リと登攀ルート

1981年ネパール日本合同ランタン・リ登山隊

はじめに

本登山隊は当初カネッシュⅡ峰を目ざし、その許可を取得したが、ネパール、チベット国境の一部変更に伴い、当初ルート(チリメコーラ側より)を中止せざるを得ず他ルートをチャーター機で偵察したが種々の問題を抱えランタン・リに変更した。

ランタン氷河最奥部に位置するランタン・リ(7,239m)は1981年4月中旬新解禁されたばかりのネパール、チベット国境の未登峰である。

結果的には事故続きの中、登頂予定者6名(内日本人5名)全員登頂を果すことができた。

最も困難な許可取得についてはネパール観光省登山部長S・R・シャルマ氏、ネパール理事ランジャン氏のご協力によるものと深く感謝申し上げます。

アプローチ・マーチ

8月22日先発隊として飯沢、山田の二名が出発翌23日偵察隊の若尾隊員(カンチ隊員として以来ネパール在)と合流する。8月30日本隊と合流、9

月3日にブリクティ延期に伴い中岡隊員が参加合流し全員集結した。その間、合同登山隊のために観光副大臣はじめネパール政府関係者、N・M・A、日本大使館等の参集を得て公式レセプションを開く。

9月5日、6日の両日にわたりカトマンズをトリスルバザールに向け出発。9月7日、85名のポーターをつかい全員でキャラバンを開始する。モンスーン期間中のため、ジュガ(山ヒル)にやられての雨中のキャラバンである。

9月9日、ボケジュンダで一日分のアドバンスマネーを支払った後、そのためか32名のポーターに逃げられ、隊荷は無事であったがポーターの補充に苦労した。

9月13日、カトマンズを出発して1週間目。シャブルの先の橋がこわれているのでシャブルベンシ経由でランタン谷に入る。『世界で最も美しい谷』と称されるだけに一面の花園に恵まれたキャラバンである。中でもエーデルワイスの群落は辺りを覆い尽くさんばかりである。

9月14日最終カルカであるランシサカルカ

(4,125m)に到着。朝夕は下のキャラバンの暑さがウソのような寒さである。

9月15日、ペンタンカルカ(4,480m)にて雪が降り周囲を白銀の世界と化した。これより先のルートはモレーン上のガラ場の連続となり足場が非常に悪く、落石等の危険も加わり予定より伸びずBC間に再びデボキャンプを設けざるを得なかった。

9月17日、ようやくランタン・リの全容を見る。山田、若尾の2名はBC位置まで偵察に先行、その位置をニセコルからの尾根の末端(4,950m)に決定する。この間のルートは絶えず落石があり、肝を冷やされる。

9月19日、BCに全隊荷が集結し、BCを建設。

登 攀

9月21日、軽度の高度障害で遅れてBC入りした隊長、ドクターを含め簡単なBC開きの後、C₁に向け荷上げを開始する。ニセコルからの尾根に沿って急登が終るとコルからの氷河の末端(5,220m)に出る。その間一部クレバスが走るが、その上

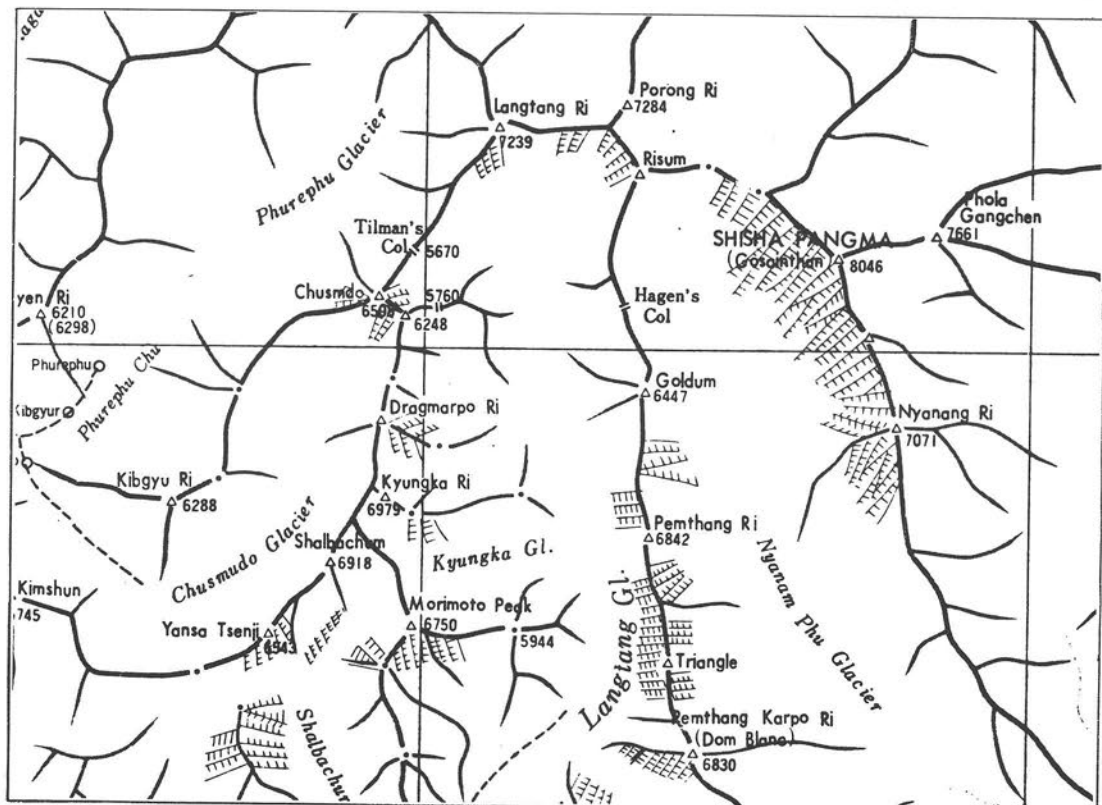
部は広大な雪原となりニセコル(5,760m)に続く。前日の偵察で決定したC₁の位置(5,550m)はニセコルとティルマンのコルの間の雪原である。

C₁までのルートはザイルも不用な容易さであり雪原は絶好のスキー場となった。

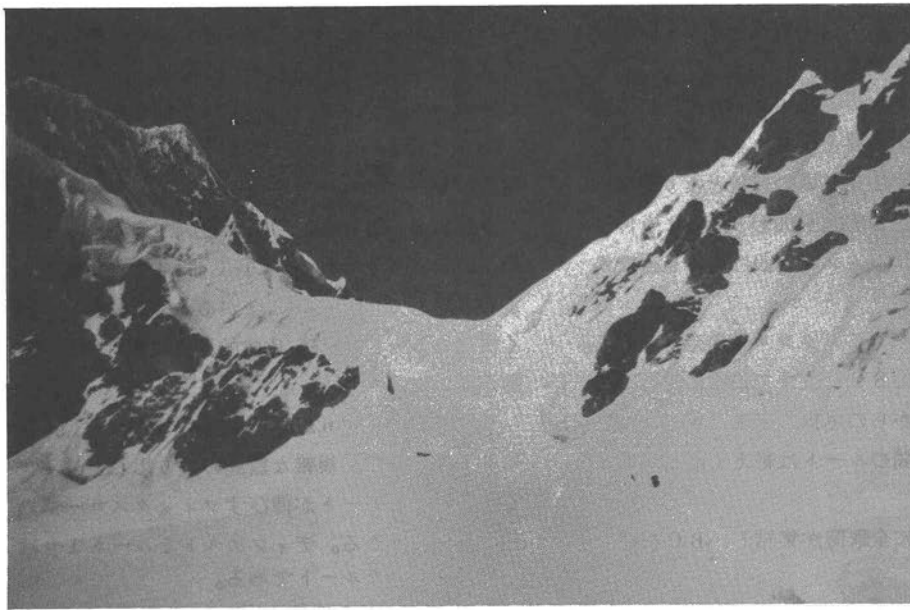
9月22日、C₁建設。翌日からC₂へのルート工作荷上げに拍車をかける。C₁・C₂間は1ヶ所雪壁をまわり込む60度くらいの壁があるものの雪稜が続く快適なルートである。比較的天候に恵れ順調な行動が続いた。

9月25日、C₂(6,200m)建設。翌日よりC₃のルート工作に入る。複雑な雪庇のはり出しとナイフリッジに阻れルートが伸びずフィックスロープの残数が気にかかる。ディフカルトなルートよりはデンジャラスなルートである。

9月27日より9月29日までの3日間降雪によりほとんど行動ができなかった。BCとC₁に停滞、雪かきに追われる。降雪はBCで40cm位、C₁で1m位であり荷上げのラッセルで相当苦労した。また、この間の降雪が今回の事故の多発を招いた感がある。これが結果的にモンスーンの最後であ



▲ランタン・リ周辺図(学研「世界山岳地図集成・ヒマラヤ編」より転載)



った。

9月30日よりようやくルート工作と荷上げに入る。C₁より上部は風で飛ばされてほとんど影響が出なかった事は幸いであった。しかし、C₂、C₃間のルート工作は雪壁のトラバース、ナイフリッジ雪庇のはり出し等で困難を極めた。その上フィックスロープ（1,850 m）も底をつき下部のロープを取りはずし上部に上げる状態である。

10月3日、ようやく難関を突破して最終キャンプC₃を6,630 mに建設。その上部偵察の結果、再び難関が待ち受けていた。稜線の状態は極めて悪

いが一部ルート工作を完了し、アタックに望みをつなぎ休養のため下降した。他のメンバーはBCより荷上げと順化のためC₃に向う。

10月6日、全員そろってBCにて休養。一同に会するのは久しぶりである。しかし、午前のネパール放送でガンガブルナ、アンナブルナフランス隊の事故を全員で聞く結果となってしまった。死亡したアンナブルナ隊のシェルバがネパール隊員アンリタの弟であり、彼女の泣声が休養中のBCを押し包んでしまった。また、ガンガブルナの事故は我々にとっても大きなショックであった。

登 頂

10月7日、第1次アタック隊、山田、若尾、那須、アンリンジの4名が隊長の茶（表千家）で安全を祈願してBCを出発、10月8日第2次隊の飯沢、中岡も同じくBCを出発する。サンゲとアンリタはフランス隊で死亡した弟のこともあって第2次隊から外れた。

10月9日、山田、若尾によりC₃上部のナイフリッジに新たに下部より回収したフィックスを固定した。明るい見通しを付けアタックに備える。

10月10日、風は少しあるが快晴である。午前6時30分にC₃を出発。昨日のフィックスザイル終了点まではバランスを要求される雪壁とナイフリッジが続く。その後スタカットで数ビッチの後比較的フラットな雪面に出ると三角形の頂上が間近にせまる。頂上直下は雪面4ビッチであった。午前11時26分第1次隊4名登頂。山田、若尾、はサポートのためC₂ステイとなる。第2次隊の飯沢、中岡はC₃でアタックに備える。

10月11日、午前6時5分にC₃を出発。快晴であるが風が強く頂上直下で思わぬ時間を費やしたが午前10時58分登頂、C₃を徹収しC₂にステイ。

10月12日、C₂、C₁を徹収、フィックスザイルを回収し、BCに下山した。成功と久しぶりの顔を互に見つめながら祝宴を開く。

頂上からの展望は北面のチベット高原が赤茶色に広大に開けネパール側の険峻な山塊とは対照的である。また、眼前にせまるゴサインタンはやはり高さを感じさせるものがあった。

10月14日、住みなれたBCを徹収、全員無事に帰路につくことができた。

おわりに

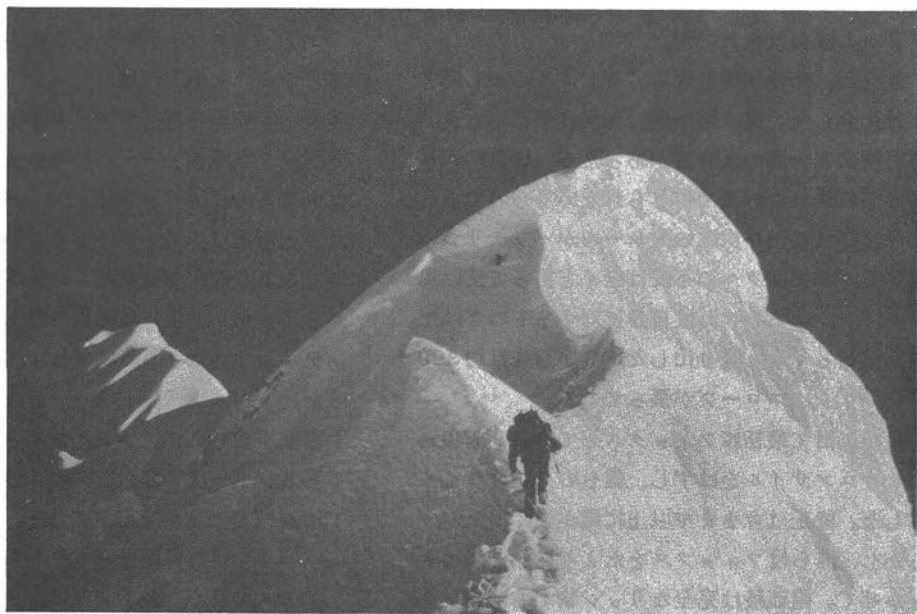
今回の遠征は当初より岳人長井（山形）のH.A.J 会員を中心に進行されて来ましたが、新解禁で未登峰のランタン・リの許可取得に際しましてはH.A.Jを核としました周囲のご協力なくてはできなかったと深く感謝する次第です。

数多くの事故が発生した中で6名の初登頂者を見ましたことは大成功であったと確信します。

合同登山隊なのでいろいろ困惑することもありましたが、日本人同志はもちろんのこと、ネパール隊員、リエゾンオフィサー等の人間関係にも恵まれました。中でもリエゾンオフィサーとは共に国境線について悩んだり、トラップに興じたりで仲間のような付き合いができたことも幸いでした。

また、高度馴化の面でもほとんど問題なく順調な行動ができたことは高所隊員の全員が経験者であったことも要因として考えられます。

（植松秀之）



ランタン・リ登頂記

中岡久

興奮の為か、初めてのC3泊となった高度の為かあまり眠れぬまま夜は明けた。風が強い。天幕は一晩中バタバタしていた。C2もそうであったがこのランタン・リ南西稜上はすごい風だ。4時、シュラフを抜け出し、朝食を作り始める。ラーメンと紅茶だけの簡単なものだ。ゆっくり食べる。今日11日の第二次アタック隊は飯沢副隊長と僕の二人である。二人とも登山活動が始まってから全く同じ行動をとってきたので、呼吸は合っている。このランタン・リ登山隊に僕が正式に決まったのはすでに先発隊が出発した後、僕の出発のわずか一週間前であった。その為、僕としてはあくまでアタックは次善のものと思っていたが、登山活動に入るとすぐに昔からの山仲間であるかのように登山に打ち込む事が出来た。そして遂に僕にもアタックの機会は来たのだ。

朝食後、出発準備をする。そして6時少し過ぎには出発した。風は強いが、天候はすこぶる良い。9月末に3日間の大降雪があったが、10月に入ってからには連日の好天で信じられないくらいである。それに昨日の第一次隊のトレールがバッチリついている。アタックへの不安は全くと言って良い程なかった。あるとすれば自分に対するものだけだ。僕らはゆっくりと登り出した。C3から先は約300m弱フィックスロープが張ってある。

稜上に出て最初にフィックスしてある9mm40mのナイロンザイルをはずし、僕らのメインザイルにした。稜上は今ままで以上に風が強く、寒い。しかし、僕らはフィックスをたよりに徐々に高度をかせぐ。南西稜は完全なリッジ状で右はランタ

ン氷河に、左はチベット側にスッパリと切れ落ちていて高度感がバググンである。展望もすばらしく、右前方に望まれるシシャバンマはさすがに、8,000m峰だけあって圧倒的である。フィックスをたよって約200mも進んだ頃、一瞬意識が遠ざかった。気がつくと二人共チベット側にぶら下がっていた。突風に飛ばされたのである。しかし、左手はしっかりとユマールを握っていた。落ちついてピッケルを雪面にさし込み、はうようにしてリッジまで上がる。股の間からチベットの荒涼とした氷河帯を見た時はぞっとしたものである。気を引きしめ直して慎重に行動する事にして、再び登り始める。それにしてもルート工作を行なった山田登攀リーダーと若尾隊員にはただただ感謝するのみ。

フィックスロープが終わる頃から傾斜はややゆるくなる。しかし急峻なリッジである事には変わりない。安全を期してスタカットで進む。風は強いが第一次隊のトレールは残っており、非常に気は楽である。チベット側をトラバースするようになると雪面はいくらかゆるくなり、風もいくらか弱くなる。飯沢副隊長はコンテニユアスで行こうかと言ったが、僕には先程の事もあり、とてもコンテニユアスにする気になれず、スタカットで行った。チベット側のトラバースが終わると正面に大雪壁が望まれた。ランタン・リへの最後の登りである。第一次隊の報告によれば傾斜約50度弱、150m位のピッチとの事である。その取付までは広いゆるやかな雪原となっており、ここはコンテニユアスで行く。左手前方にはチベットの赤茶け

ランタン・リ
頂上(背景は
チベット)



た高原がバーンと広がっているのが見え出した。ああ、あれがチベットか、一度は行って見たいという思いにとらわれる。そうしているうちに取付についた。ここで小休止、そしてランタン・リへの最後の雪壁を登り出す。風が強く、顔が痛い。また飛ばされたらそれこそ一巻の終りなので慎重に一步一步登る。雪壁の一步一步は苦しいが、あと少しでピークだ。そう思ってただひたすら高度をかせぐ。確保は慎重に、ゆっくり行なう。第一次隊の事を思えば僕らは第二次隊だ。いくらかでも余裕を持たねばと思いながら登る。

C3を出てから5時間弱、午前10時58分、7,239mのピークにいつか立っていた。ピークはそんなに広くなく、3~4人でいっぱいになる。一瞬ボーとなっていった。いろいろな思いが頭の中をかすめた。しかし、ピークは風が強く、いつまでも留まる事は出来ない。早々とピークでの型どおりの儀式を済ませる。前面にはいつまでも僕らを圧倒するかの様にシジャバンマが立ちはだかり、その左方には荒涼としたチベット高原がはるか遠く地平線まで広がっていた。後ろを振り返ると今登ってきた南西稜が一気にランタン氷河に落ち込み、右方遠くマナスル山群が望まれた。しかし、その感概も一瞬の間で、30分程で下り始める。下りは登り以上に慎重にゆっくり行動した。ピークが少しずつ見えなくなる。取付に戻った時、ホッ

とした。しかし、まだまだ安心は出来ない。今日はC3を撤収してC2まで戻らなければならないのだ。慎重にゆっくり下り、1時間半程でC3に戻る。さらにC3の荷を撤収してC2に向かった。C2の手前でC2上部のフィックス回収と僕らのサポートに来てくれた山田登攀リーダーと若尾隊員に合流する。しばしの歓談の後、僕らが先行してC2へ向かった。そしてC2での夜は4人の仲間との楽しい語らいの場となった。

今回、僕が第二次隊であるとはいえ未踏の7,000m峰に登頂出来た事は正に幸運だったと思う。何しろ当初のブリクティがだめになった為、急遽参加したランタン・リでは登頂は次善のものと思っていたのだから。腹藏なく迎えてくれた植松隊長はじめ隊員の方々、そしてHAJ事務局の方々には心から感謝している次第です。

1981年ネパール日本合同ランタン・リ登山隊

隊長	植松秀之(42) 岳人長井
副隊長	飯沢 実(31) 岳人長井
登攀隊長	山田 昇(31) 沼田山岳会
隊員	若尾巻広(31) 諏訪山岳会
	結城正明(29) 医師
	那須宗一(28) 岳人長井
	中岡 久(31) 東京白樺会

アンダーマン諸島の旅から

亜留奈

《インド内務省は日本国籍にして日本国旅券保持者である〇〇〇が1977年×月×日から△月△日にかけRestricted Areasである北・中央・南アンダーマン島の、Reserved Areasを除く地域に立ち入ることをここに許可するものである》

こんな文面の許可証を思いがけなく手にしたのは12月もおしこめた、ダーズリン行き直前にしたカルカッタでのことだった。私には二カ月前アンダーマン諸島への入域を申請してことわられたという経緯があった。それが再申請を待たずして突然舞い込んだのがこの手紙だった。

飛行機の出発は霧のため2時間程遅れた。ヤシの木が眼下に去ったあと、ガンガー・ブラフマプトラ河河口に沿って飛びつづける。数カ月前ダッカからニューデリーに向かったときに比べ水量といい水の色といい、かなりの変化をみせていた。東南アジアから飛行機でインドに向かったとき、「ああ、ベンガルにやってきたな」と感じるのはいつもこのデルタの風景を上空からながめたときだ。

約3時間の飛行でラングーンに到着する。パゴダのような建造物が点在し草地に囲まれた飛行場に着陸する。何となく静かで数時間前に出たばかりのカルカッタと奇妙な対照感を受ける。カルカッタにくらべ格段に暑くムッとする。男の人達のルンギー姿が目につく。この数カ月後に今度は正式にビルマを訪れることになるのだが、このときビザなしでビルマの地を踏んだというのは妙な感じだった。そういえば、今朝の出発の時の出来事を思い出した。事務所からの連絡バスで空港に着いた私は早速搭乗手続きをしようと思いポートブライアー行の便のカウンターを探したのだ。ところが、国内線出発ロビーのどこを探してもそんなものは見当らず、うろろろしているうちにどんど

んチェックインの締め切り時間が迫ってきていた。思い余って職員に聞くと、「国際線出発ロビーに行ってください」と言う。国際線？とは思ったものの荷物をかかえてあわてて移動すると、確かに、すみの方にポートブライアー行という札が下っている。国際線ロビーに国内線のIAのカウンターがあるとは奇妙に思われたが、いざ手続きとなるとパスポート・入域許可証はまだしも、税関申告書・検疫報告書を書かされるにいたり、それははっきりと不安に変わってしまった。ことによるとこれは出国扱いでビルマのトランジットビザを取っていないとアンダーマンには行けないのではないか。だとすると、すでにビザの延長をしていた私は公安への出発報告も再入国のためのReturn Visaも取っていないではないか。それはとんでもないトラブルに自分が落ちいることを意味していた。いささか取り乱して「出国の手続きは何もしていないが大丈夫か」と聞くと、IAのカウンター職員が一瞬怪訝な顔をし、そのあと少しばかり力を入れて「アンダーマン諸島はインドの領土なのだ」と答えたのだった

20分の休憩後、再びポートブライアーに向う。今度はベンガル湾の上を目的地までひたすら飛び続ける。

青い海の色が淡い空色になってきたころ、飛行機はぐっと高度を下げ、ヤシの木が一面に茂り、意外と高低のある南アンダーマン島の飛行場に着陸する。

同行のオーストラリア人家族の4つになる男の子が、一番にタラップを駆け下りていって、両手を腰にあて、あたりをへいげいし、一声「Here is Andaman Island !!」と叫ぶ。私はあい変わらずのセーター姿でその後に従う。

飛行場といっても大きな管制塔や空港ビルがあるでもなく、滑走路までタクシーか他の車が入り

こんできていた。荷物の受け取りも飛行機の止ったその場所で行われた。

まず公安警察のお出向えを受けパスポートと許可証をあずけさせられる。宿は別に予約もしていなかったがどうやら旅行者用のはひとつしかないらしく(当時)、そのTourist Home へと向う。

こじんまりとした起伏が続き、道はその間をぬっていく。陸地がつまり海に囲まれた有限の土地だなという感じが、そこここにただよっている。ここが今から35年前(旅行当時)、1942年3月23日に日本軍に占領された土地なのだ。そして戦後生れの私は一旅行者としてこうして旅行している。インド現代史を学ぶ者である私は、このあと占領期前後の様々な事実に出会うことになる。

Tourist Home はAberdeen Bazar を通りしばらく行ったら、静かな岬の上に建っていた。平屋の瀟洒な作りのところだ。テラスに出るとカルカタ〜ポートブライアー〜マドラーズの周回航路の船が着くHaddo Jetty を奥にひかえた湾が見下せる。波もなく青い静かな海が眼下にひろがり、それがずっと水平線まで続いてかすんでいる。

相変らず熱の下らない私は、日がな一日そのテラスにすわって海を見ているのだった。インドに着いて以来、気負い込んで旅行してきた心も休まるような風景だった。太陽の動きにつれ、湾内の海は色を変えていく。その中をマドラーズに向う船が出ていく。湾を出るところで汽笛をひびかせる。二年前の沖縄を思い出す。

Aberdeen Bazarは島内へのバスターミナルからはじまっている。バスターミナルは天井の高い四方吹き抜けるいかにも南の島らしい作りのところだ。そこを通過してバザールは500メートル程直線につづいている。生活必需品はすべてそろっている。大きなヤシの実がこの島らしい。冷たい飲み物は何もない。氷をけずり何やら毒々しいシロップをかけた食べ物と、塩と氷で温度を下げ砂糖水を凍らしたなつかしいアイスキャンデー屋ぐらしか目につかない。冷たいコカコーラなどもありもせず、ただビンだけがならべてある。陽射しは刺すように強い。

バザールからTourist Home まで海ぞいに歩いて40分位はかかる。途中陽の光を遮るものもなく

ただでさえだるく熱っぽい身体なので日中はとても出歩く気がおこらない。

Tourist Home下のFisheries Jettyに船体に漢字の書かれた船が、気がついた時から停泊していた。台湾の船だった。

Commissioner Courtはバザール横の丘の上に建っている。下からゆっくりと登っていくと入口に古い建物が建っている。確かこれは前に本で見たことがある。その前で日本軍の上陸部隊が整列している写真だったろうか。

Commissionerを許可証のことで訪れる。役人のほとんどは占領時代からこの島にいる人だ。役所は昼休みを二時間とって、ほとんど四時には終ってしまう。古い木造の二階建がオフィスになっていた。Commissionerの部屋の入口に腰かけていたチャブラスィー(雑用係)の老人が私を見て一瞬息をのむ。「ニッポンジョートカ、ニッポンジョートカ」。それが日本語の単語だと理解するには時間がかかりすぎた。彼は交代時間が来るのを待って私の手を引くようにして裏手にある職員専用の休憩所に連れていった。自分はグラスでお茶を飲み、私の目の前にはお菓子とコーヒークップに入ったお茶が置かれていた。「ヤギ先生という先生に教わり、みんな坊主にさせられ日本語を教えられた。食事はヤシの実とチャバティーだけだった」。ハンカチの結び目をほどこ、その中にくるんだ小銭をとり出し彼はお茶代を払った。

この時期のアンダマーン諸島の旅のことを詳しく話すのにはもう少し時が必要なようだ。「戦後32年、はじめての日本人だ」という彼らのせりふはまずはノートにとどめておくだけにしたい。

帰りは船でマドラーズに出ることにした。5日間かけてのベンガル湾横断の旅になる。就航25年目というM.V. Andamanがその船で牢獄のような二人部屋で船賃260ルピーだった。インドの旅にも馴れていたつもりの私だったが、Bunk class だけには乗りたくなかった。

マドラーズに着くころには悩まされつづけた熱もすっかりとれていた。真黒に陽焼けしていた。

(これは1977年のメモで今では旅行事情も大きく変っている。)

インド領カラコルム その1 サセール・カンリ山群

稲田 定重



サセール・カンリI峰西面 (AAJ)

本誌90号～101号に連載した「末踏への訪い」ではインドヒマラヤを扱った。今回その続編として「カラコルム・ヒンドゥークシュ編」を連載開始する。とりあえずインド領カラコルムとしてサセール・カンリ、マモストン・カンリを2回にわたって掲載するが、以後カラコルム・ヒンドゥークシュ各山域をそれぞれの精通者に執筆をお願いし、毎月お届けする。どうぞご期待を。

インド領カラコルム

K・メースン、F・E・ヤングハズバンドら当時の著名な地理、測量、探検関係者が集まってカラコルム協議会が開かれ、カラコルムの命名・区分が検討された。この中でカラコルムの東部境界はシャイヨーク河 (Shyok R) の大屈曲までとした。リモ氷河を源頭とするシャイヨーク河は、そのすぐ下流でカラコルム峠およびその東方デブサン高原の北を源とするキブ・チャップ河 (Chip Chap R.) をあわせ、マモストン・カンリ (Mamostong Kangri)、サセール・カンリ (Saser Kangri) の東を南下し、パンゴン湖 (Pangon Tso) に発する支流をのみこんでサセール・カン山群の南端で突然流れを北西に転ずる。カラコルムの東の境界はシャイヨーク河によって区切られている。

「インド領カラコルム」とは、1949年の第1次インド・パキスタン戦争停戦により画定された国境 (停戦ライン) を境としてインド領内にあって地理上の「カラコルム」の区分に属する山群を指しての仮称である。

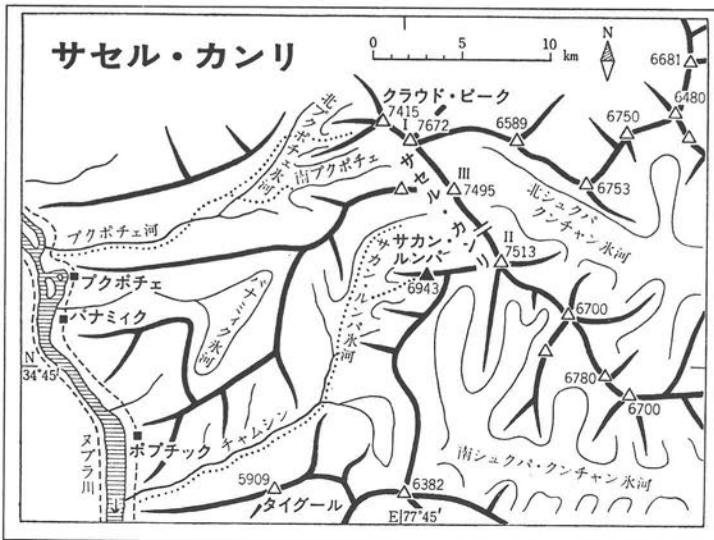
この区域内に所属するのは、カラコルム協議会の区分による下記のグループである。

- リモ・ムズターグ (Rimo Muztagh)
South Teron group
Sherkar group
Kumdan group
- サセール・ムズターグ (Saser Muztagh)
Saser group
Chhushkun group
Shuupa Kanchang group
Arganglas group
Kunzang group
Shyok group

印・パ国境

われわれがパキスタン領カラコルムの東端およびインド領カラコルムをめざす場合最も気になるのは両国の国境がいったいどこを走っているかである。国境のうちカラコルムを横断する部分は直線的に引かれている。通常の国境のように地理上の妥当な線で画定されたものではない。無人地帯は一直線である。

越境問題はヒマラヤ登山史の中で幾つもの事例が見られるが、この地域などは最たる危険をはらんでいる。まして、緊張関係が今なお持続する印パである。パキスタンが国内のほとんどの山を開



深田久弥「ヒマラヤの高峰」白水社より転載

放している現在、その東端国境まで登山隊が入ることが可能になっている。

しかし、インド側はその西部国境付近に厳重な外人立入禁止区域を設定している。国境付近の水河がほとんどインド側に向けて流下している地理的特性からも細心の注意が必要である。

現在、中国・インド・パキスタン3国の国境はカラコルム峠(5,574 m)において接している。印・パ国境は峠から南西に走る。Central Rimo 氷河と South Rimo 氷河の合流点から約4 km上流のP.19472 付近、South Rimo 氷河のPoint 5225 North Terong、South Terong、Sherkar Chorten 3氷河の合流点付近、Siachen 氷河末端のDzingrulmaの上流約1 km、Saltoro Rangeを横断し、76年飯田山岳会隊が登頂したGharkun (6,620 m)の東を南下し、Korisa氷河から南にまっすぐシャイヨーク河に至り、Charunkaの約2 km 付近で河を渡る。

中・印国境

ラダックの北方山城への入域を困難にしているもう一つの問題は中国とインドの国境問題である。中国とインドの間には、東部のマクマホン・ライン(ブータンの東)と西部のアクサイチンをめぐって大きな見解の相違があり、両区間の間の長大な国境の幾個所かでも局部的な係争地域がある。近年、マクマホン・ラインとアクサイチンに関し

て何らかの了解があったと伝えられるが明らかではない。たてまえはともかくとして、両地区とも現状の実効支配線をめぐってニュースになるようなトラブルは見られない。

アクサイチンは、シャイヨーク河の東に広がる広大な高原地帯で、荒涼たる無人の地である。新疆省とチベットを結ぶ新疆、チベット自動車道路がバンゴン湖の東からアクサイチンを南北に縦断しカラコルム峠の北でヤルカンド河沿いに新疆に至っている。1959年にはじまる中印国

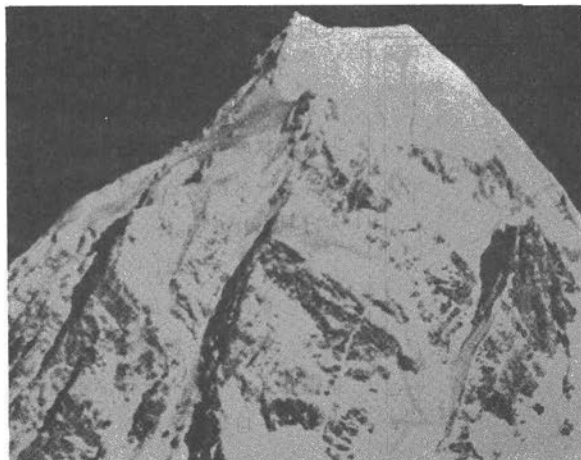
境紛争では、カラコルム峠の南東のキプチャブ河流域、サセール・カンリ東北のシャイヨーク付近、バンゴン湖付近で両国軍による紛争が起っている。

両国発行の地図を見ると国境線は相互に入りこんでいる。中国側の地図によると、実効支配線はシャイヨーク河左岸におよんでいると主張している。いづれにしろこの地域をめぐる双方の主張の根拠は17世紀にまでさかのぼり、きわめて複雑である。近い将来に明確になるとは思われない。インド領カラコルムおよびパキスタン東部国境付近は、大ヒマラヤにおいて最も未解明な地域であり、未踏峰の宝庫である。早く緊張要因が去って自由に入域できる日のくることを切望している。

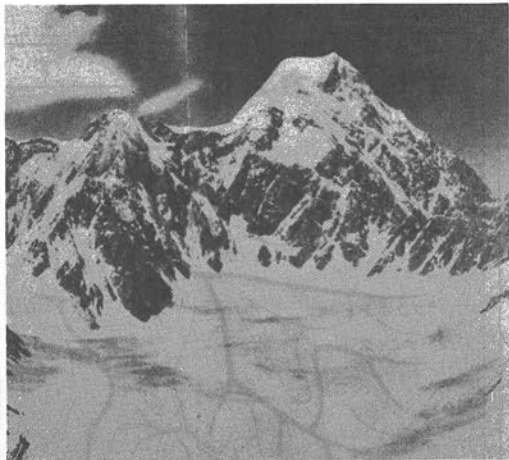
サセール・カンリ山群

ラダックの首都レーからカルドゥン・ラ(Khardung La)を越え、シャイヨーク河、ヌブラ河(Nubra R.)沿いにサセール・ラを越えてカラコルム峠にいたる道はひじょうに古くから歩かれた交易路である。わが国の大谷探検隊もこのルートを下下している。初期の探検者の多くはカルドゥン・ラを越えヌブラ河側からサセール山群にアプローチしている。I峰に初登したインド隊は、レーの南のチャン・ラ(Chang La)を越してシャイヨーク河に下り、アッパー・シャイヨーク河をさかのぼって山群の東側から接近している。

サセール・カンリグループの主要ピークは北



サセール・カンリⅢ峰東面(AAJ)



サセール・カンリⅢ峰西面(AJ)

から、Ⅳ峰(クラウド・ピーク 7,415 m)、Ⅰ峰(7,672 m)、Ⅲ峰(7,495 m)、Ⅱ峰(7,513 m)で、Ⅱ峰の西にサカン・ピーク(Sakang Peak 6,943 m)がある。6,000 m峰はひじょうに多い。これらのうち登頂されたのは下記の峰である。

Ⅰ峰(1973年 J・シン隊) R6140 R6187 R6187 R6553 R6855 (1970年 H,V,パフグナ隊) サカン・ピーク, R6401 (1956年 N.D.ジャル隊) ルックアウト・ピーク R6250 (1947年 J・O・M・ロバーツ隊)

●サセール・カンリⅡ峰(7,513m)

東面の氷河の名をとってシュクバ・クンチャン(Shukpa Kunchang)とも呼ばれる。Ⅲ峰との間のコルは5,940 mで、1947年のロバーツ隊が西面のサカン・ルンパ氷河(Sakang Lungpa G.)からこのコルに達している。

東面からのⅡ峰はシュクバ・クンチャン氷河に切れ落ちている短い東稜とⅢ峰のコルへ続く北西稜、C6,700 mへ続き顕著なコルをつくる長い南西稜ともに稜線はやせていて手ごわい。

東面からのⅡ峰は「赤い岩の大きな城」のように見えたと言われているが、ルックアウト・ピークからのロバーツの写真をみると巨大な量感をもった岩のピークである。東面からⅡ・Ⅲのコルへは雪壁となっているが比較的容易に達せられる。しかし、稜線はギャップの多い岩稜で困難な登攀となろう。サカン・カンリからも一旦落ちこんで登る岩稜である。1956年、N・D・ジャルのインド隊は、Ⅰ峰を断念してⅡ峰に転進した

がサカン・ピークに達しただけである。

●サセール・カンリⅢ峰(7,495m)

Ⅰ峰とⅡ峰の間にある。西面はサカン・ルンパ氷河の上部プラトーの奥にあってⅡ・Ⅲのコルから登ることができる。コルからは岩稜だが上部は広い雪のスロープで台形の頂稜を持っている。

東面のシュクバ・クンチャン氷河側の支稜はいづれも急峻なパットレスをなしている。

Ⅰ・Ⅲのコルからも充分可能で、上部は雪稜である。東面氷河からⅠ・Ⅲのコルへは容易に達せられる。

●サセール・カンリⅣ峰(7,416m)

Ⅰ峰のすぐ北にあるが写真・記録とも未見である。

この山域に入るには、山にとり付く前にアブローチの問題がある。カラコルムの巨大な氷河を源とする河川は初夏から急激な増水に見舞われ、徒河徒渉を困難にする。特にシャイヨーク河の増水はひどく、夏期のキャラバンは想像を絶する困難をともなう。里から離れているだけに橋はなく、河幅は広くて架橋も不可能である。1973年のインド隊は飛行機でレーに入り早いキャラバンを開始して往路は成功した。しかし、帰路は増水のためシャイヨーク河を下れなくなり、北上してサセール・ラを越えてヌブラの谷を経由した。キャラバンの総行程は600kmに達したという。

また、入域は依然として困難である。

次号では、マモストン・カンリを中心に印パ国境沿いの山々について記す。(つづく)

VISIT TO HIMALAYAN CLIMBING TEAM ①



出利波氏



黒川氏



山口氏

東海大学ネパール・ヒマラヤ登山隊 (ビッグホワイトピーク 7083m)

出席者 出利波義次(副隊長) ・聞き手 角田 不二
黒川 隆史(隊員)
山口 洋(隊員)

ヒマラヤへ出発直前、それはどんな人にとってもとてもステキな季節であろう。皆、それぞれに精神が高揚している筈である。そんな時期の仲間たちの姿をとらえてみたい！——そんな期待を込めて、新連載企画“VISIT TO HIMALAYAN CLIMBING TEAM”をスタートさせてみた。第1回は東海大学ビッグホワイトピーク隊。さて、どんなハナシが出てくるか！?

中国からネパールへ転進

——ヒマラヤ遠征は初めてですか？

出利波 ネパールヒマラヤは東海大としては初めてです。過去にヒンドークシュとかアラスカには行ってましたが、

——ヒンドークシュというところ？

出利波 だいぶ昔なんですけど、OBがルンコーに登っています。

——ああ、鈴木政孝さんとあと法政の人ですか、あの時代としてはすごい登り方したんですよね。

出利波 ええ、まあ、で、そのあと1968年にティリチミールに行ったのですが、これは残念ながら登れなかった。それ以後ちょっと沈滞ムードになりましてね。やっぱり大学山岳部って波がありますから。まあ、その点今は割合動けるメンバーが揃っている時なんですよ。2年ぐらい前からヒマラヤを前提とした大きな山行にとりくみましてね。冬期の北アの横断、鹿島槍～牛首尾根～ガンドウ尾根～剣とか、縦断として西穂高から親不

知までやりました。

——どういう経緯でネパールヒマラヤ、そしてビッグホワイトピークを選ばれたんですか。

出利波 1979年頃から中国を考えていたんです。ウチの大学の海洋学部で中国へ船を出したことがあって、史占春と会っていろんな話もしました。それでミニヤコンカあたり考えていたんですが、あまりにもお金がかかりすぎるということがわかって魅力を感じなくなってしまった。それでネパールに変えたんですが、私たちは処女峰とかそういうことはあまり意識していない。ただあまりにも頻繁に登山隊が入っているような山は避けたかった。まあ、ビッグホワイトピークならここ20年近くも空白だし、かつて全日本岳連隊が3回も挑んでやっと登ったというような由緒正しいというか登り甲斐のある山だろうということになったわけです。ただ山を決めた時点ではジョイントなんてことはまったく考えていなかったんです。ところが申請してみたら、向こうからジョイントだと云われて、ちょっと戸惑いました。「山を変えようか」なんてことも少し考えましたが、まあNMA

とのジョイントということでなんとか折合がつき
そうなので、そのまま進めたわけです。

—— 山選定の段階で意見の対立はなかったんですか。

出利波 ウチのような大学山岳部の場合、いわゆる社会人団体と違って、ピラミッド型のタテ社会なもので、そういうことはありませんね。私と隊長の加藤の間では「もっと他にいい山があるのではないか」とかいろいろ話しましたが、学生連中は「とにかくどこでもいいからヒマラヤへ行きたい」というのが殆どだし……。

—— じゃ若い方はどうですか。副隊長サンの前でですけど「本当は俺はもっと他にやりたいところがあるんだ」みたいなハナシがあったら、聞かせて欲しいんですが。

黒川 今度の計画は、現在のクラブの力量から判断して、まあ必然的に出てきたと思います。で、ちょっと時代主義的な感じもするんですが、「どうしてもこうしてもヒマラヤへ行きたい」という欲求があるんです。ところが、それほどヒマラヤについて知識があるわけではないので、僕らにはどの山がどうだとかいうことがあまり云えないんですね。ただビッグホワイท์ピークという山を見ると、僕らの山登りにあっていて、しかも割とおもしろそうだし、登れるんじゃないかと思いました。

山口 まあ今まで精一杯日本の山を登ってきてようやく海外の山にも興味を持ち始めたという段階ですからね。そういう時期に今回のような計画が出てきたので「それじゃ行こう、ぜひ行きたい」となったんです。だから主脳部で計画を煮つめてそれに僕らが参加するというパターンになりますね。今回はとにかく経験してみても、次は自分でやってみたいという気もあります。

黒川 やっぱそういうパターンになりますよ。まだ僕らの世代には主張するものがないですから。それに今、僕ら4年部員なんで、現役の部活動に大きな責任がありますから、まずそっちをキッチとやってその次にヒマラヤということになります。

部活動とヒマラヤと……

—— 私の知っているある大学山岳部が、この

秋に遠征をやったんですが、そこのクラブの現役主将がものすごく計画に熱意を持っていたんですね。でもチーフリーダーというのは現役の活動に責任のある立場だから、長期間部を留守にしていかにということ、OB会の許可が得られず、泣く泣く断念したというんです。そのあたりのことどうお考えですか。

黒川 その点僕らは恵まれていて、今4年が5人いるんです。だから僕と山口と2人抜けてもさほど問題はない。

出利波 主将はこの2人の他にいます。彼は魅力を感じなかったのかどうか知りませんが、この計画には参加の意志を示さなかった。

—— もし主将が行きたいと云ったらどうします？

出利波 技術的には特に主将が優れているというわけではないんで、今の4年は皆平均して一応信頼できるレベルに達しています。ただ、部をまとめていくという立場の違いなんですね。で、結局OB会で協議することになるでしょうが、まあ難しいかもしれませんね。しかし、現役の側からそういうこと（主将の遠征参加）は云い出せないんじゃないのかな。どうだ、君たち。

山口 これはあくまでも僕個人の意見なんですけど、それは情況しだいだと思います。主将の留守中に誰かがキッチと代行を勤めるとか、そういう責任体制が確立できれば可能なんじゃないかと思いますが。

—— 実は私も大学山岳部出身なので、割とその辺のことはわかるんですが、いずれヒマラヤに限らず、部活動と自分のやりたいことの両立が難しく、ちょっとジレンマを感じるっていうことあるでしょうね。

黒川 あります。それは当然あります。でも、やっぱり先輩に教えられた技術は後輩にも教えてあげなければならないという義務感がありますし、しょうがないですよ。

—— 大変優等生でいらっしゃる（笑）。

黒川 えっ、あ、そうですか（笑）。ただウチの場合割と恵まれていて、よく人から羨ましがられるんですが、大学の近くに岩のできる場所なんかがあって、ボルダリングの

好きな人なんか、ちょっと授業のあいまとか、あるいは授業をさぼってちょくちょく出かけたりしています。僕なんか、まあまあ部をやりながらも好きなことをやってるんです。

やはり確実に頂上に立ちたい

——じゃあ、ぼつぼつ遠征の具体的なハナシをうかがいたいと思いますが。メンバーは何人ですか。

出利波 6人です。あとジョイントですので、ネパール側から3人入って全部で9人です。ネパール側といってもシェルバですけどね。

——ネパールでのジョイントというのは、普通の遠征よりもお金がかかるとは思いますが、個人負担はどのくらいなんですか。

出利波 40万か、あるいはもっとかかるかもしれないけど50万以上には絶対にしないつもりです。というのは来年は東海大学創立40周年にあたって、大学の事業の一環としての協力体制ができますからそれでできるわけです。まあ大学が協賛という形です。はっきりと大学主催の事業となったら個人負担なんてゼロの筈ですから。

——それはいいですね。ネパールの7,000 m級をシェルバを使ってオーソドックスな登り方したら、1人あたり80~90万はかかりますからね。

出利波 大学の副総長の松前達郎が山岳部長でして、そういう意味では恵まれています。

山口 80万とか90万なんて云われたら、僕なんかもうそれだけでダメです(笑)。

黒川 40万だって学生の身分では楽じゃないですよ。

山口 もともとお金なんてぜんぜん持ってないし、結局親に借りるしかないですから。出世払いというか、就職したら返すということ。

——いや、それにしても40万でビッグホワイトピークに登ればこんないいことはない。ルートは初登ルートですか。

出利波 そうです。ランタン側からランシサ氷河経由も考えましたが、下部が悪いんです。あとドルジェラクバ氷河側は、氷河の手前の峡谷部が通れなくて、結局全日本岳連のルートが最も理想的ですね。登攀内容も興味深いものがあるし、加

藤幸彦さんの話ではかなり厳しいようなんですが、まあそれは20年前のことですから。

—— ルートの内容はどんなふうなんですか。

出利波 下部の氷河がやたらと長くて、スキーができるような所が20kmもつづいているんです。その前後にちょっとしたアイスフォールが2ヶ所ありますがね。でもこれは弱点をつけたいたしたことはない。上の稜線へつきあげる所なんかは、写真で見てもちょっと厳しそうです。

—— もちろん隊長さんや副隊長さんは充分に検討されて妥当な所を選ばれてるんだと思いますが、若い方はどうですか。可能性は低くなくても未踏ルートに行きたいなんて考えませんか。

黒川 僕らがもっと経験積んでれば、もっと違うルートも考えたと思いますが、初めてですからね。やはりこのルートしかないと思います。

山口 アドベンチャー精神が足りないと言われるかもしれませんが、やはり僕としては確実に頂上に立ちたいし、まあいずれはバリエーションを考えるかもしれませんが、まずはここをと思いますね。それに登攀内容は決して易しいものではない。

—— 登り方はどんなふうにお考えですか。

出利波 やはりオーソドックスな極地法です。ただ、私たちのクラブでは普段から冰雪壁におけるスタカット、コンティニュアスというものにもすごく力を入れて研究、努力してるんです。だから今回ヒマラヤでそれがどこまで通用するか試してみたいと思っています。まあ、ファイナルまでは危険箇所については安全性を高めるためにフィックスするつもりですが、アタックの時はそういったものの成果を期待しています。

—— ロープはどのくらい持っていけますか？

出利波 2,600 mです。

—— これをやついたら、次はもっとレベルの高いヒマラヤをお考えですか。

出利波 ええ、やはり8,000のジャイアントをねらいたいですね。

——がんばって下さい。今日はお忙しいところありがとうございました。

(11月29日 新宿カトレアにて)



花を求めて(16)

水野 勉

だらだらとつづくこの「花を求めて」もようやくぼくの好きな本の領域に入ってきた。というのは、これから扱おうとするレジナルド・ファーラーはそれまでの人びととちがう。すぐ前のジョージ・フォーレストとも明らかにちがう。たぶん、ファーラーの最大の攻績は、中国奥地の花々を採集したこと自体にあるのではなく、そのことを魅力ある文章で書いたことである。この本を出すことによって、じっさいにかれの著作を読んだ人びとばかりでなく、もっと広範囲にわたって影響を与えた。そして、かれが著作で書いた植物や花々は一般大衆が求めるところとなり、広く栽培されるようになった。はじめは、ヨーロッパ・アルプスの高山植物を主として紹介したけれども、主著 *On the Eaves of the World* (1917) 2vols および *The Rainrow Ridge* (1921) が現われて、極東の植物や花々がたいへん一般的に栽培される刺激になった。更に、植物愛好者ばかりでなく、この二著は中央アジアの地理に興味を抱く人びとをも魅きつけたのである。

ややオーバー気味に語られる、その生き生きした描写、いつも快よくひびく感情などで、多くの人びとを庭園の花々へ誘い入れたのであった。かれ自身、山々の中でいつも楽しんでいたのであった。

ここでファーラーの出現の新鮮さを明らかにするために、いままでの園芸界のことを少しかえりみてみよう。19世紀はじめになると、たしかに、園芸協会はできていたし、園芸のエリートたちもいて、中国の園芸植物を紹介しようと熱心になっていた。けれど、じつに少数であった。

当時はまだ園芸の大衆化がひろまっていなかったのである。需要はごく一部の人びとからであって、いくら普及しようとしても、うけ入れる場が

なかった。ロバート・フォーチュンなどが出て、いくらか一般化したけれども、全くとるに足りなかった。第一次大戦までは、園芸界はヴィクトリア時代と同じような状態であったといえよう。ウィルソンがさかんに四川省の珍しい植物や花々を紹介したけれども、大衆の庭園にまではひろまらなかった。限られた植物園や専門家の間に知られただけであった。このため、現在ではウィルソンの採集した植物をみつけることがむずかしいのである。

第一次大戦が終ると、戦争によって紹介がなかったことに対する反動として、そこに一般的な園芸需要が増大した。それに、ジョージ・フォーレストやキングドン・ワードが出現してその需要に答えたとし、レジナルド・ファーラーの著作が、アジアにおける花々に対する一般的な興味をかき立てた。

あまりにファーラーの本のことばかりいうと、いかにもかれが採集者としてはあまり活躍しなかったように聞えるが、そうではない。かれ自身すぐれた採集者であった。植物に対して鋭い目を持っていた。ただ、植物採集者としてよりは、その紹介者としての方で、かれの優秀さが発揮されたのである。かれは雑草数をひどく嫌っていた。それでそれらの標本を採集しようとはしなかった。植物学的立場からみると、未知の地域におけるあらゆるものが採集される価値があるのだから、かれの方法はまちがっていた。かれの2回にわたる遠征が、非常に植物の豊富な地域で行なわれたにもかかわらず、わずか1920種しか採集されなかったことを考えれば、よくわかるであろう。

レジナルド・フォーラーは1880年に生れた。子供的时候は身体が弱かったので、ヨークシャー州

イングルボローの家庭で教育をうけた。そこは石灰岩の丘陵地帯にあり、ブリラン諸島でも最良の山の植物がみられた。少年のときから、山岳地域が好きで、14才のときにはじめて自分のロック・ガーデンをつくった。オクスフォードに行っからは、大部分の時日をヨーロッパ・アルプスで園芸を植物採集に費やした。

1913年にかれは The English Rock Garden を書いてから(それが発行されたのは1919年であった)かれの関心は中国に向けられた。図書館で植物

(中国の)について熱心に研究している間に、かれは北西甘粛におけるブルジェヴァルスキーとポターニンの植物採集の記録にひきつけられた。その地域には高山植物が豊富で、更に調査することが必要があることを感じとった。かれは同行者としてウィリヤム・バードンをえらんだが、バードンはすぐに1911年に秦嶺山脈を旅行した経験を持っていた。すぐれた旅行者で、最後には中国政府の森林監督官になったが、いつもひっこみ思案で、表面には出たがらず、ファーラーの影にかくれていた。バードンは中国をよく知っていて、中国人からもよく慕われていて、甘粛遠征が成功したのは、かれの人格と知識によることが多い。当時の甘粛チベット国境は不穏な政治状況にあって、治安もたいへん悪かった。

第1年目、1914年には、ファーラーとバードンは蘭州の南の丘陵地帯で仕事をした。この地域はかってポターニンが仕事をしたところで、特にその仲間ベレゾフスキーは珍しい動物を発見している。ファーラーはその記録の上でいつも中国語の地名の一般的な表記を採用せず、自分独自の発音で記しているので、かれのルートをたどるのはいささか苦勞する。

ここで *Vidurnum fragrans* を野生種としてはじめてみつける。この植物は何世紀も前から北部中国ではポビエラーなものだったが、その原産地が発見されたのはこのときはじめてだった。

第一次大戦のため、ファーラーの1914~15年に採集した植物はほとんど生き残らなかった。

蘭州で冬を過した後、かれらはココノールの方へ向い、西寧まで行った。この辺はブルジェヴァルスキーが仕事をしたところだったが、なぜ、か

れがこの地域に魅きつけられたか、ファーラーには理解できなかった。植物があまり豊富でなかったからである。しかし、サクラソウを数多く発見したり、重要な花を三つ紹介している。Aster Farreri, 美しいバラ Rosa Farreri, …… 香りのするエーデルワイス *Leontopodium haplophylloides* などである。

ファーラーが帰国すると、園芸のすべてのプランなどは戦争で消えてしまった。かれは情報省に勤めた。かれの唯一の慰めは著作であった。On the Eaves of the world および the Rainbon Bridge は1916と1918との間に書かれた。しかし、戦争が終ると、ふたたび英国をはなれた。今度同行したのはコックスであった。ファーラーが狙ったのはウィルソンの仕事をした湖北および四川の地域であったが、これは問題外だった。雲南はジョージ・フォレストによって組織的に調査されていた。ネパールにも強くひかれたが、それは不可能だった。甘粛にふたたび行くつもりはなかった。残ったのは北部ビルマだった。中国国境付近は山岳地帯で探検のブランク地域だった。

かれらは1919年、北部ビルマの鉄道終点ミトキナから北へ150マイルほどのところにあるビマウを基地としてえらんだ。かれらは3月から11月中旬まで熱心にこの地域を調査してすごした。しかし、低い地域はモンスーンによるものすごい密林と竹藪のためどうすることもできなかった。

1919~20年の冬コックスが帰国した後、ファーラーはマイミヨで数か月をすごした。かれはイラワジ川の西支流、マリ・ハをさかのぼり、フォルト・ヘルソまで行き、東へ向った。そこはかれらが前年にいた地点から120マイル北方にあたっていた。この年はファーラーにとって辛い年であった。気候は悪いし、じつに不便な場所だった。そこでかれの体力は消耗してしまった。1920年10月17日に、かれは死亡した。もし生きていたら、かれは何をしたか、推測するのはむなしいが、たぶん、ヒマラヤへ花を求めたかもしれない。あるいは採集の現場から引退して著作に専念したかもしれない。コックスは *Farrer's Last Journey* をその紀行として書いている。(つづく)

寸 感

春のカンチェンジュンガ登山、夏のパキスタンの山旅、秋のガンガブルナ登山を終えて9カ月ぶりに日本に帰ってまいりました。夏まではまあまあ楽しくやっていたのですが、秋に大事故を起してしまい、大きな坐折感とともに日本の土を踏んだಿದೆです。事故処理も一段落し、再び「ヒマラヤ」の編集を担当することになりました。私個人としても捲土重来また新たなヒマラヤの高峰をめざすつもりですが、「ヒマラヤ」誌面においても、今年は新局面を打ち出していければと念じています。とりあえず新連載企画を2つ作ってみました。「未踏への誘い・カラコルム・ヒンドゥークシュ編」と「VISIT TO HIMALAYAN CLIMBING TEAM」です。特集も今後さらにクリエイティブな姿整で様々な企画を考えていくつもりです。よろしくお願い致します。(角田)

事務局日誌 (11月)

1 (日) ナンダカート事故説明会

- 7 (土) 第2次カンチェンジュンガ学術調査隊
(五百沢智也, 小野有五) 出発
酒田市小松伸会員宅にてティリツォ・ピーク登山隊 (1982年秋) 打ち合せ (山森他)
- 12 (木) 1982年度登山学校打ち合せ (於H.A.J. ルーム 稲田, 山森, 稲垣, 角田)
- 19 (木) 事務局会議 (稲田, 山森, 角田)
- 28 (土) ~ 29 (日) 日本ヒマラヤ会議前橋会場開催
(群馬県山岳連盟と共催, 於新花茶屋)
- 29 (日) 東海大学ビックホワイトピーク登山隊インタビュー (角田)

ヒマラヤ No.122 (1月号)

昭和56年12月10日印刷 57年1月1日発行

発行人 柴田 金之助

編集人 角田 不二

発行所 日本ヒマラヤ協会

〒160 東京都新宿区高田馬場3-23-1
淀橋食糧ビル506号



ヒマラヤ登山の専門家

SITA

並ぶものない山岳サービス

- ★ インド政府許可証
- ★ 通関手続
- ★ 交通機関
- ★ ポーター
- ★ ハイポーター
- ★ デラックス食料賄い
- ★ テント宿泊用具
- ★ マウンテンガイド

SITA WORLD TRAVEL (INDIA) PVT. LTD.

F-12, Connaught Place, New Delhi-110001, India

Cable : SITATUR Phone : 45961 Telex : 2823

日本代表

ファースト エンタープライゼス

東京都港区北青山3丁目6番18号 青山共同ビル

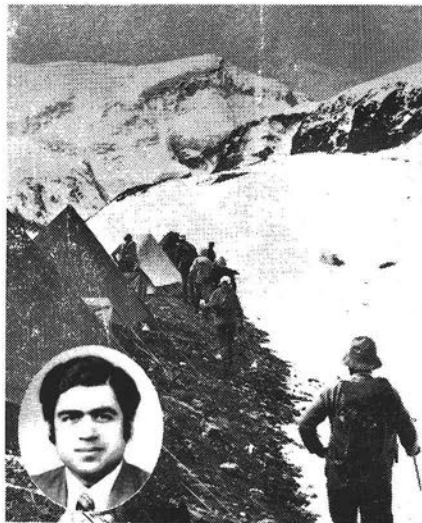
☎407-8100 (代表)

Shikhar Travels

—— シカール・トラベル ——

“魅惑の インド・ヒマラヤ”

シッキム・ブータン・ガールワール・クマオン
クル・マナリ・ラダック・ネパール・・・・・・
へのトレッキングや登山を計画されている日本の皆さん！
当、シカール・トラベルは、通関・隊荷輸送からガイド、
ポーター、ポニーのアレンジなどすべてのご用命を承ります。



CAPT SWADESH KUMAR
(MANAGING DIRECTOR)

Shikhar

TRAVELS PRIVATE LIMITED

1,701, Nirmal towers,

26 barakhamba road new delhi-110001

tel. 42555, 42666 telex 03174364 SHIK IN Cable SHIKHE

Branch office: Gangtok

Camp office: Joshimath & Uttarkashi



インドヒマラヤを日本語で!!



UNITED TRAVEL SERVICE (P) Ltd.

■インドヒマラヤ全域のアレンジをすべて日本語
でひきうけています。本社にも東京事務所にも日
本語に堪能なスタッフが多数おります。

■許可取得から通関、隊荷輸送、ポーターアレン

ジまで、遠征・トレッキングのすべてを取り扱っ
ております。

■詳細は東京事務所のサニーまでお問合せ下さい。
もちろん日本語で!!

東京事務所

〒141 東京都品川区西五反田 2-23-11-202 電話 03-493-4920

本社 (デリー)

802 Nirmal Tower, 26 Barakhamba Road, New Delhi India

Phone: 46107, 42804, 43984, Telex: ND3174 Cable: YOKOSO

ヒマラヤへの装備



◎遠征隊の装備、相談にのります。



ICI 石井スポーツ



- 新宿登山本店 / 〒160東京都新宿区百人町 2-2-3 ☎03(208) 6601(代)
- 新宿西口店 / 〒160東京都新宿区西新宿 1-16-7 ☎03(346) 0301
- 水道橋ハードギアショップ / 〒101東京都千代田区三崎町 2-8-14 ☎03(264) 5575
- 水道橋ソフトウェアショップ / 〒101東京都千代田区三崎町 2-8-6 ☎03(264) 8901
- 大宮店 / 〒330埼玉県大宮市宮町 2-123 ☎0486(41) 5707
- 高崎店 / 〒370群馬県高崎市新町105 ☎0273(27) 2397
- ICI通販部 / 〒160東京都新宿区大久保 2-19-10東和ビル内 ☎03(200) 7219